



Title	加藤先生のお人柄
Author(s)	瓦井, 裕子
Citation	語文. 2020, 115, p. 7-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

加藤先生のお人柄

瓦井 裕子

平成十九年、京都の私大に通う三年生だったとき、発表の調べものの中で加藤先生のご論文を偶然手にした。論文を読んであんなに胸が高鳴ったのは初めてだった。どうしてこの人はこんなところに気が付くのか、どうしてこんなに明快に論じていくのかと、たちまち魅了された。こんなふうに私も物を見てみたいと、勉強嫌いの大学生が、無謀にも先生のいらっしゃる大阪大学大学院を目指すことになつたのだった。とはいっても、あんな論文を書くのだから、とんでもなく厳しい恐ろしい先生かもしれない。こつそり四年生の春から夏にかけて懐徳堂講座に通つてみると、先生はまだ生まれたばかりのお子さんの写真を受講者たちに見せて、それは嬉しそうにしていらっしゃった。ご論文の印象とはかけ離れたお姿に安心した私は、九月に大学院を受けて、なんとか拾つていただけのことになつたのだった。

「それ、先生にはできても、私たちには絶対無理やんな…」、大学院演習が終わった後、院生だった私たちはよくそう溜息をつい

ていた。先生は発表を黙つてお聞きになつたあと、そもそも大前提を覆すような、こちらが考へてもみなかつたことをさらつと指摘なさる。今した発表が抛つて立つていたものは崩れていき、その荒野から必要な材料だけをぱつと拾い上げて、こちらがあつけにとられているあいだに新しいものを創り上げていく。それは鮮やかとしか言いようがなかつた。論文にしたらおもしろいには違ひないけれども、私たちの力量では到底無理で、やはり先生にしかできないものだった。でも、先生はそれを院生にも求められ、前提を覆そうとしない発表はお叱りを受けた。学部時代に読んで憧れた先生のご論文、研究者になるつもりもなかつたのにどうしても先生のところへ進学せざるをえないほど私を魅了した先生のご論文の、緻密で実証的なのに大胆な魅力が、授業の端々に光つていた。

先生はいつも通説や前提を信じなかつた。あの気の遠くなるような時間と労力をかけて作られた『源氏物語』『伊勢物語』の校

本、まだ本になつてないさまざまご研究。基礎研究をあれほど堅実に整備される一方で、常に良い意味での野心家でいらっしゃつた。今はまだ、先生のご研究を振り返るにはあまりに辛い。完成させられずにお逝きになつたご無念がのしかかつてくるようで。

先生のご葬儀は、阪大のすぐ傍で行われた。私は斎場を後にしてもすぐには離れがたく、なんなく阪大へ向かつた。四階の研究室には誰もおらず、先生の研究室だったあたりで茫然としていると、その部屋の火元責任者が「加藤教授」のままになつてゐるのが目に入った。急に、「この部屋の火元責任者は私ですからね、まあいいでしょ」という何年も前の先生の言葉が蘇つた。卒論の提出時期に、先生は研究室で鍋パーティーを開かれるのだった。鍋と手巻き寿司と、先生お手製のローストビーフや二種類のチーズケーキ。美味しい美味しいと言つて食べる学生たちを、「そんなもの簡単につくれるよ」とおつしやつて楽しそうに眺めていらっしゃつた。先生はほとんど召し上がりなかつたと思う。先生はごくごく少人数の会食でしか、ほとんど箸をおつけにならなかつた。誰もいない四階に留まつても證のないことなので、外へ出た。足は自然に共通教育棟裏の駐車場に向いた。私たち院生はここからお車に乗せていただきて、琵琶湖や神戸や心斎橋、いろいろな所へ行つた。先生は院生たちと出かけるのを、少し面倒そうな素振りをなさりながらも、楽しんでいらっしゃつたようだつた。いつからか、前期が終わると千里阪急や宝塚ホテルのビアガーデン

へ行くようになつた。後期には少し遠くまで食べにいつた。やっぱり味見程度にしか召し上がらない。ご自分は召し上がるなくて、院生たちが食べるのを見るのはお好きだつた。私なら自分が食べないのに食事に連れていくなんて考えられないけれど、先生はそうだつたのだ。いつもご自分が手にするより、人の樂しそうにしているのを見ることを喜んでいらした。

千里阪急へはモノレールに乗らないといけないので、私が車でお送りした。緊張しながら普段の三倍は丁寧に運転した甲斐あって、「瓦井さんらしい運転だね。また乗りたくなるよ」と褒めてくださつた。続けて、「研究も同じだね」というようなことをおつしやつたと思う。博論の口頭試問では私の論文を評して「危ういダンス」とおつしやつたけれども、どちらがどうだつたのか。それからも何度も先生は助手席に乗つてくださつた。研究以外で先生のことを振り返ると、思い出はいつも車の中だ。

最後に先生にお会いしたのは、今年の三月だつた。神戸のホテルオーラーでお茶を飲みながら、窓の外のハーバーランドを眺めて、「そういえばあそこに行きましたね、よりによつてクリスマスイブにねえ」と笑われた。「観覧車に乗つたんだつけ?」「みんなで乗ろうと言つたんですけど、あの日は午後から会議がおありだから、乗らなかつたんですよ」、先生は会議があるのに院生たちが行きたいと言つたから、わざわざ連れてきてくださつたのだ。お茶をしながら、先生は妹さんに時計をプレゼントしたいとおつしやつて、どんな時計がいいかたずねられた。その前にお会いし

た去年の年末には、奥さまにバッグをプレゼントするとおつしやつしていく、どこの中のがいいかたずねられたのだった。ご自分のものにはご興味がなくとも、周りの人たちを喜ばせるのが本当に好きだった。

オーラから元町駅まで送つていただく短い時間、とても驚くことがあつた。先生の運転免許が「ゴーレド」というのだ。「そんなこと信じられません」と言うと、「失礼だなあ、もうずっとゴーレドだよ」とおっしゃる。先生のお車に乗せていただいた院生たちは、きっと誰もゴーレドなんて信じない。大型バイクに乗つて高速でBMWと追いかけっこをした話や、鍋パーティーのとき文学部棟の前にすごいブレーキ音を立てながら横滑りのようなバックでお車を停めて皆を驚かせたこと（後輩は私の腕をつかんで「あれ本当に大学教授の運転ですか!？」と叫んでいた）、アクセルの踏み込み、シフトチェンジ、どれをとってもゴーレドの要素はなかつた。でもゴーレドだつたんですね、なんだか先生のご研究みたいだ。「コロナが落ち着いたら会いましょう」と言つて別れたが、それからすぐに緊急事態宣言が出され、とてもお会いできる状況ではなくなつてしまつた。

七月、あと二年弱に迫つた先生のご還暦に合わせて記念論集を企画し、松本が先生に打診した。先生は快諾してくださつた。そのテーマにも、先生は何か新しいものを求められていた。「享受とかはもう目新しくないから、何かまったく新しい切り口でやりましょう」、テーマを提案する係に指名された私はとても悩まされ

た。ご自身も、執筆する弟子たちの半分も享受の研究をしているのに、先生の中ではもう享受は真正面のテーマにはなりえなかつた。新しい切り口、新しい概念。先生はそれを追い続けてここまで研究していらっしゃつたのだろう。結局、新しい切り口は見つからなかつた。何度かやり取りをするうち、次第に私は、その論集が還暦記念としては出版されないかも知れないことを悟らざるをえなかつた。快諾なさつたと聞いたときから、無性に恐かつたのだ。いつもの先生なら「そんなこといいよ、それより自分の研究をしてください」とおっしゃると思つてた。先生は、そこに何か希望を見出されていたのかも知れない。論集の話をしてからまだ二ヶ月しか経つていないのに、こうして追悼文を書いているなんて。

九月初旬、去年書いた論文がある賞をいただけることになり、すぐ先生にご連絡した。きっとそれどころではないだろうに、先生はたいへん喜んでくださつた。私の心中を言い当てた短い文章が記されていた。私は泣きじやくりながら返信した。多分お互に、これが最後のメールになることが分かつてた。

先生がもういらつしやらないというのがどういうことなのか、私にはまだ分からぬ。急逝はいまだ信じがたく、悲しみの淵はあまりに暗い。

私は何もかも遅かつた。著書をお見せするにも二週間間に合わなかつた。あれほど喜んでくださつた授賞もお見せできない。それに、私が今の研究を始めたときからずっと期待をかけてくだ

さつていたこと。何年もずっと見つからなかつたけれど、今年に入つていくつか例が目につきはじめた。「コロナが落ち着いたらお会いしてお目にかけたいです」、結局そう言つたまま見ていただくことができなかつた。どうして何もご恩返しできないまになつてしまつたのか。本当に、どうしようもない不肖の弟子だ。でも、そんな後悔も小さなことだつた。あの日の明け方、ご逝去の報とともに伝えられたやり残されたお仕事への思いは、決定的に私を打ちのめした。先生のご無念は、本当にいかばかりだつたか。遺された私たちは、先生のお仕事を世に出していくかなればならないと思うものの、いつたい何ができるだろう。先生のご研究は、先生にしかできないから輝いていた。

お伝えしていたこともある。先生の下で研究できてどんなに幸せか、先生をどれほど尊敬しているか。それは事あるごとに申し上げていたように思う。たぶん話半分にお聞きになつていただろうけれど、今なら分かつていただけるだろうか。いつかまたお会いする日、「まあ頑張つたんじやない」と言つていただけるように、悲しみの淵からもまた、歩を進めなくてはならない。

先生、あらゆることが偲ばれ、痛惜の念は募るばかりですが、今はまだ安らかに永眠されますようお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

（かわらい・ゆうこ 就実大学講師）